

大学生の年金への知識と意識を明らかにする～質問紙調査を通じて～

チーム名：お茶の水女子大学 永瀬伸子研究室

チーム構成員氏名：東井愛佳、亀山暖加、木下聡実、志賀向日葵、塩谷奈菜、高橋京子、世永愛璃（3年生）、太田美帆、深澤千帆、村尾あかり、藤原愛、山根瑠璃（4年生）¹

1 はじめに

昨今、年金に関する問題がメディアでも多く取り沙汰され、事実多くの年金問題に関する論文が発表されている。しかし、年金制度を担っていくであろう直近の次世代である大学生を対象にした研究は少ないということが見受けられた。このことより、これからの年金制度を支えていく一員である大学生へとフォーカスをあて、質問紙調査を通じて彼らの年金に対する実態を明らかにすることを考えた。実態を明らかにすることによって、年金に対する若者の認識と問題の所在を指摘することを目的とする。本発表の構成は、始めに調査結果を単純分析したものを提示し、実態を「年金知識」「年金教育」「大学生の描く将来のライフコース」「年金に関わる諸制度等」の4つに分け明らかにする。その上で、それぞれの大学生の年金に対する考えを考察していく。

2 調査内容と方法

2-1 調査方法

調査は、大学へ学生が赴きカフェテリアなどにいる学生に質問用紙を配布し回答してもらいその場で回収する方法をとった。なお調査にご理解とご承諾をいただいた先生方の講義時間内に訪問し、その授業内で質問用紙を配布し回答をしてもらいその場で回収するという方法も補完的に2校で実施した。質問用紙の調査項目は大きく分けて回答者の属性、年金への満足度とその詳細、ライフコース、年金知識に関する問題、年金教育、年金に関わる諸制度とその詳細の6つである。

2-2 調査対象者

調査対象者は、首都圏の23大学に通う大学1年生から院生までであり、972部配り、そのうち回収できたのは967部(回収率99.5%)であった。また、回収できた967

¹ テーマと仮説は学部3年生と4年生とで検討、質問紙はゼミ3年生が作成、ゼミ4年生が改善点などコメントした。質問紙の配布と集計及び分析は学部3年生が担当した。

部のうち今回使用する属性（性別、年齢、自身の学校区分、居住形態）が揃っている 967 部(有効回答率 100%)を分析に使用した。

分析に使用したデータにおいて、男性が 465 人(48.1%)、女性が 502 人(51.9%)で男女に差がない。年齢では、19 歳と答えた人が 314 名 32.5%と最も多く、次に多いのが 20 歳と答えた人で 224 名 23.2%であり、学部 1、2 年生中心の回答となっている。学校区分では、共学が 826 名 85.4%、別学（女子大学）が 141 名 14.6%である。居住形態（実家か実家以外）では、実家と答えた学生は 677 名 70%、実家以外と答えた学生が 290 名 30%であった。

3 調査から得られた大学生の実態

3-1 大学生の年金への考え

「あなたの年金への満足度」について 5 段階で質問したが、「不満」「どちらかといえど不満」と答えた人は合わせて 515 名(53.3%)おり、また 364 名(37.6%)が「どちらともいえない」と答えているという結果を得ることができた。一方で、「満足」「どちらかといえど満足」と答えた人は、86 名(8.9%)しかいなかった。これによって半数以上の学生が年金に対して不満に思っているということが分かり、反対に年金に対して満足している人は一割にも満たないということが明らかになった。また、「不満～どちらともいえない」と答えた人に聞いた 6 つの選択肢から 5 段階評価で求めたところ、もっとも多かったのは「将来もらえるか不安」で、89.5%の人が肯定の回答をした。つまり、9 割近くの人が将来年金をもらえるか不安と感じており、年金に対し負の感情を抱いているということになる。このほかに「もらえる額に世代間格差がある」、「年金の運営が不透明」の二つの変数に約 70%の人がそれぞれそう思うと答えていたため、これらも年金への負の感情を与えている一つの要因ではないかと考察する。

「年金への満足度」に肯定的な学生とどちらかともいえないと答えた学生に肯定する理由を 5 つの質問を用いて質問した。どちらともいえないという人にも聞いたことから約 75%もの人が「先のことでピンとこない」に対しそう思うと答えており、年金ということに対して実感できていない人が多いということがわかった。5 つの変数のうちの満足である理由の変数として、「国が行っていて安心」という回答項目がある。これに約 3 割の人がそう思うと答えていることから、国が行っているということが一定の信頼感を与えているのではないかと考えることができる。

3-2 大学生の年金の知識と知識獲得の場所

大学生に対し質問紙調査内で6つの年金に関する知識問題を出題した。全問正解できたものは一人のみで全体の0.1%、しかし全問不正解した人は211名おり、全体の21.8%にもものぼる。そして、全問不正解の人と2問正解までの人で全体の80%を占めることから、大学生の年金知識が乏しいということが分かった。また、基礎年金の支給額を答える設問において、基礎年金支給額を現行の満額の金額よりも少ない金額を答えた人の割合が5割いることや、国民年金の年金保険料を現行の納付金額よりも多い金額を答えた人が約4割いることがわかった。このことから、間違った知識を持っているということが年金への不満をさらに高めているのではないかと推測される。

また、年金の知識を得る場所については主に、テレビのニュースから得ている人が最も多かった。テレビのニュースがネガティブな情報を発信することが少なくないことから、大学生の年金に対する不満や不安を高めているのではないかと推測する。そして、「印象に残っている授業はいつか」という質問に対し、半数以上の人が「特になし」と答えていた。一方、印象に残った授業がある人の中では「高校生のとき」を答えた人が全体の半分を占めていた。学年別にみると一年生が一番多く「高校生のとき」と答えており、学年が上がるにつれ「高校生のときと答える人が減少するほか、印象に残っている授業はないと答える人の数が増加傾向にあるとわかった。

3-3 大学生の描く将来のライフコース像

大学生の将来のライフコースとして、結婚願望や希望する収入、働き方などについて聞いた。結果、将来結婚したいと考えている人は全体で約8割おり、また子どもが欲しいという変数に対しても同じく約8割もの人が肯定していた。その他、将来専業主婦になりたいかという質問に対し肯定する人も男女計で約2割おり、また配偶者に専業主婦になってほしいかという質問では、約1割の人が肯定した。大学別にみていくと、国立大学において肯定する人が特に低く、逆に私立共学上位等難関大学に通う大学生において、肯定する人が相対的に高い傾向が見られた。

将来自分が得たい収入願望としては一千万円以上と答えた学生が最も多く約3割おり、また将来配偶者に稼いでほしい収入として同じく一千万円以上と答えた人が最も多く約1割5分いた。自分と同程度の収入を求める人が多く見られ、かつ専業主婦になりたい、なってほしいという人が少ないということから、伝統的な性別役割分業意識である、男性が女性を扶養するという考えが変わり、同程度に働くような共働き思考を持つ人が増え、ライフコースの願望が変化してきているのではないかと考える。

3-4 年金に関わる諸制度についての大学生の実態

大学生が直接関わる年金の制度として「学生納付特例制度」が挙げられる。今回調査した大学生のうち、この制度を知っているという人は全体の約3割であった。しかし、成人している学生の方が未成年の学生よりも知っているという人が2倍近くいるということもわかった。成人している人で使用している学生は約半数いるが、使用しているかわからない学生も約2割いた。この制度について知っている人が何で知ったかまたいつ知ったかという質問に対し、親から、大学一年生のときと答える人が最も多かった。

また、個人年金についても質問した結果、知っている、まあ知っていると答えた人は、全体の約4%であった。ここから個人年金について知っている大学生はほぼいないということが分かった。また個人年金の説明をした上で聞いた「個人年金に加入したいか」という質問には、約3割の人が加入したいと答えており、約2割の人が加入したくないと答えた。大学生に一番関わる年金の制度である「学生納付特例制度」が約7割の大学生に知られていないというのは、先の年金知識の不足と関連しているのではと推測する。

4 大学生の実態と大学生の年金への考え

上記までで、大学生の実態を4つのセクションに分けて述べてきた。ここからは、この実態と大学生の年金への満足度などを、SPSS等を用いて統計的に検定した結果を述べていきたいと考える。調査対象者の属性より、成人している学生の方が、統計的に有意に年金に対して不満が高いことがわかった。しかし、性別や居住形態によって年金への満足度の平均値に有意な差があるとの結果を得ることはできなかった。このことから、成人している学生は未成年の学生よりも年金の納付対象者になるため、年金に対しより意識するようになり、また負担感も増えるということからこのように年金満足が統計的に有意に低いという結果が出たのではないかと推測する。

3-2の年金知識より、印象に残った授業がある人ほど正解数が多いという統計的に有意な結果を得ることができた。ところが、正解数が多い人ほど年金に対しての不満が統計的に有意に高いという結果を得た。これは、年金に対して正しい知識があるからこそ、将来もらえるか不安、徴収額が支給額に見合わないといった不満である理由と関係し、より不満を持たせる結果になっているのではないかと考える。そして、知識を得るその方法によってもネガティブな印象を持つかということにも関係すると考えられる。

続いて、3-3のライフコースより、結婚願望や世代間扶養が必要という変数と年金への満足度は、統計的に有意な結果は得られなかった。しかし専業主婦志向の大学、性別別に見た場合、国立、私立共学上位等難関大学で専業主婦志向が強い女子学生の年金満足度は

有意に高く、専業主婦否定が強い女子学生の年金満足は有意に低いという結果が得られた。また、男子学生においても、国立、私立共学上位難関大学で配偶者に対する専業主婦志向が強い場合に年金の満足度が高く、しかし男子学生の専業主婦否定が強い場合は年金の満足度に有意差はなかった。

3-4の年金に関わる諸制度より、個人年金に加入したいという変数と年金の満足度には有意差は見られなかった。また学生納付特例制度を知っていることと年金への満足度では、有意差はみられなかった。以上の結果より、年金に対して不満に思っている人は、知識がある、成人している人が多いということがわかった。また、専業主婦になりたくないと思っている難関大学の男女は不満に思っており、なりたいと思う難関大学の女子学生は満足に思っているということがわかった。

5 終わりに

今回、首都圏の23の大学に通う大学生に質問紙調査を行った結果、大学生の知識の乏しきや年金制度への誤解、年金に対する考えを知ることができた。また、大学生の将来の展望や制度の使用状況を聞くことができたことにより、大学生の現在の実態の一端を明らかにすることができたのではないかと考える。本調査では、教育をどのように受けてきた、年金に関する考えがマイナスになるような知識の獲得はいつ行われるのか、逆に年金に対してプラスになるような教育があったかといった事柄を深めることはできなかった。そのため、次回機会があるときはここについて深めていきたいと考える。

参考文献

佐々木一郎(2008)「若者と年金問題」 『保険学雑誌』 No.603 69-86 頁。

永瀬伸子(2011)「第3号被保険者制度の見直しを」『週刊社会保障』第65巻 2658号 44-49 頁。

永瀬伸子(2011)「若年非正規雇用の現状と年金を含めた社会的保護の在り方」『年金と経済』第29巻 10-22 頁。

樋口修(2009)「年金記録問題の経緯と課題」『調査と情報－ISSUE BRIEF』654 1-10 頁。

三上竜也(2010)「日本の公的年金制度の課題 ～スウェーデンに学ぶ年金改革～」『香川大学経済政策研究』第6号、pp71-97。

棕野美智子・田中耕太郎(2016)『はじめての社会保障 第13版』有斐閣選書。

村中考史ほか(2015)『労働者像の多様化と労働法・社会保障法』有斐閣。